

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

得宗家の乳母と女房：得宗 被官関係の一側面

著者	山内 吹十
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	80
ページ	27-43
発行年	2013-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/10617

得宗家の乳母と女房

—得宗―被官関係の一側面―

山内 吹十

1. はじめに

本稿は、得宗家に仕えた女性、とりわけ乳母・女房の担い手について考察し、それに基づいて得宗被官（御内人）家の階層分化を論じるものである。

得宗被官家の階層分化については、佐藤進一氏・奥富敬之氏により、有力（上層）被官家・一般（下層）被官家という区分がなされ、近年では細川重男氏により詳細な位置づけが示されたところである。⁽¹⁾

それによると、有力被官家の中でも、得宗家の公文所執事を世襲によつてほぼ独占した長崎（平）氏が被官層の頂点にあり、これに同じく執事を輩出し、長崎（平）氏とともに寄合の構成員を世襲した尾藤氏・諏訪氏を合わせた三

つの家が「執事三家」として被官層の頂点に君臨するものと位置づけている。

また、寄合には参加できないものの、執事を輩出したり、鎌倉で顕著な活躍が見られたりする工藤氏・安東氏は「執事補佐家」とされた。これら「執事三家」「執事補佐家」は、他の被官家に見られない高い地位を世襲によつて固定的に獲得した「特権的支配層」であつたと理解されている。⁽³⁾

他方、北条氏得宗家・庶流各家における女性の研究は、鎌倉後期政治史研究の進展や史料集の充実もあり既に大いに進展しているところである。とはいえ、そこにおいては、北条氏と他氏の婚姻関係を概観したものや、著名な人物の個別的研究、一つの庶流家の系譜にかかる女性の研究といったものが大半を占めている。⁽⁴⁾

得宗家の乳母・乳母夫については、有力被官家の個別的
研究の中で、その検出・検討が数多くなされてきた。⁽⁵⁾ また
近年では森幸夫氏により、その基本的な見通しがすでに付
けられている所であるが、なお論じ残された点があるよう
に思われる。また得宗家女房に関する包括的な研究は見ら
れず、基礎的作業もなされていないのが現状であろう。そ
こで本稿では、先学によりながら得宗家の乳母・乳母夫・
女房衆の網羅的な検出・検討作業を行い、得宗家に仕えた
女性集団についての包括的研究を行う。

そうした作業を踏まえ、鎌倉後期に形成されていた得宗
―被官関係を、従来充分には検討されてこなかった視角か
ら明らかにしていきたい。

2. 得宗家の乳母

乳母とは実母に代わって子女の養育にあたる女性であ
る。鎌倉期においては、一般的に、権力者の乳母となった
女性とその一族が得る高い政治的地位と、豊かな経済力な
どが指摘されてきた。⁽⁷⁾

武家における乳母研究において研究対象とされたのは、
専ら源家將軍の乳母であり、これら先学においては、

・源氏將軍は、源家一門や幕府の有力者の妻を乳母と

していた。

・主君である將軍と、その一族を養育する乳母及び乳
母夫との間に、擬制的な親子関係が形成されていた。
・將軍家の家格上昇とともに乳母は公卿・諸大夫の妻
が勤めるようになった。

といった特質が明らかにされている。

また、平安後期以降、養君に対する影響力を増したのが
乳母夫である。その地位に関しては、それが必ずしも「乳
母の夫」を意味するものではなく、乳母を出した家からふ
さわしい人物が選定されたことも指摘されている。⁽⁹⁾

一方得宗家の乳母・乳母夫については、冒頭に述べたよ
うに、得宗被官研究の中で多く論じられてきた。ここでは
先学に依りながら、得宗家の乳母・乳母夫（父）について
再検討する。

a. 北条時実―尾藤景綱

泰時の次男であった北条時実は、安貞元年（一二二七）
に家人高橋二郎に殺害された。『吾妻鏡』には同日に尾藤
景綱が出家を遂げたことが見え、その理由は「依為武蔵二
郎乳母夫」ということであった。⁽¹⁰⁾ 得宗の子弟の乳母夫とし
ては、最も早い例である。

尾藤氏は秀郷流藤原氏を出自とする御家人で、景綱は北条義時・泰時に近侍し、これに先立つ貞応三年（一二二四）には北条泰時の「後見」たる得宗家初代家令に就任するなど、得宗被官層のリーダー的立場にあった。

b. 北条時頼―平盛綱、諏訪盛重

無住道暁の著作『雑談集』には、幼少の北条時頼が弓矢の遊びを好まず堂・仏作りに夢中になっているので、平盛綱・諏訪盛重等が止めようとしたが、泰時はそれを制し時頼の好きにさせた、という逸話が記載されている。⁽¹¹⁾

森幸夫氏は、平盛綱が諏訪盛重と共に時頼の養育係であったことを述べられた上で、この逸話の時期について、時頼の父時氏が六波羅探題職を退いて鎌倉に帰った寛喜二年（一二三〇）四月以降のものとされた。⁽¹²⁾ 時頼四歳ごろのことであり、森氏は平盛綱の立場を乳母夫とみて間違いないのではないかと推測されている。

確かに森氏の指摘の如く、盛綱が時頼の乳母夫であった可能性は考えられるが、時頼の乳母・乳母夫を直接示す史料がない上、得宗家の家嫡を養育するのが乳母夫だけとは考えがたい。泰時の腹心として泰時邸内やその周辺に居住していた有力被官が、日常的に幼少の時頼に接するのは自

然なことであろう。

平盛綱は、北条泰時から北条経時への執権代替によって、得宗家執事を沙弥右連に譲っており、経時執権期に時頼発給文書の奉者を務めている。⁽¹³⁾ そして、寛元四年（一二四六）の経時から時頼への交替後、再び執事に就任した。⁽¹⁴⁾

こうした動向から、少なくとも経時執権期に平盛綱が時頼の後見と定められていたことは推測される。幼君の成長後に、後見としての乳母夫が付けられる例は当時から見られる所であり、よって盛綱がその任にあったことも考えられる。⁽¹⁵⁾

ただ尾藤景綱や、後述する南条頼員のように、後見といえど何よりもまず家政機関の長を指すのであり、先に見た平盛綱の奉者役もその文脈で理解される。従ってこれが乳母夫と必ずしも結びつくものではないことは留意する必要がある。⁽¹⁶⁾

c. 北条時輔―諏訪蓮仏（盛重）、南条頼員

宝治二年（一二四八）五月、北条時頼と將軍家女房との間に長男宝寿丸（時輔）が誕生した。同年七月九日より雑事が始行されたが、それを勤めたのが乳母夫諏訪入道蓮仏（盛重）であった。⁽¹⁶⁾ 宝寿の生誕間もなくして乳母夫に指名

されたようであるが、盛重は当初その任を固辞しており、ようやくこの日諸事が開始されたのである。固辞の理由は定かではないが、正妻の子でない人物の乳母夫を務めることを渋ったのかも知れない。

結局時輔と盛重との関係を示す史料はこれ以降見られず、後年時輔の「後見」として、南条頼員が見られる。⁽¹⁷⁾南条氏は伊豆国南条を名字の地とする一族で、有力な得宗被官家の一つである。梶川貴子氏は、頼員の立場を、時輔の家政機関の「執事」というべき立場にあったと推測されている。⁽¹⁸⁾

d. 北条貞時―平頼綱

重見一行氏により紹介された、正応四年（一二九一）出版の親鸞著『教行信証』写本「出版奥書」に、「当副將軍相州大守平朝臣乳父平左金吾禪門（法名杲円）」とあり、平禪門（頼綱）が北条貞時の乳母夫であることが明らかにになった。「乳父」という記載からして、頼綱の娘が乳母であったと思われる。

e. 貞時の娘―工藤右近父（頼光）

『親玄僧正日記』正応六年（一二九三）十月一日条に、「姫

御前護刀事、乳夫子息工藤右近為使者示送」とあり、「工藤右近」の父が貞時の娘の乳母夫を務めていたことが見える。

鎌倉期の工藤氏で、系図上「右近」を名乗るのは宗光または貞光である。⁽²⁰⁾世代的には、史料上に「杲暁」として見える工藤時光が、前年の正応五年から得宗家公文所執事を勤めている。杲暁から一代下ると、「次郎右衛門尉」を名乗る工藤貞祐の活動初見が徳治二年（一二三〇）である。このような別流の活動年代から、系図上では、「工藤右近」は宗光、その父で貞時の娘の乳母夫を務めたのは頼光に比定される。

杲暁が公文所執事を勤めたこの時期は、「執事輔佐家」工藤氏が、得宗被官として隆盛を極めた時期であった。頼光の一流も、工藤光泰が小侍所所司、工藤貞光が御内侍所を務めるなど、有力者を輩出している。

f. 北条高時―長崎円喜（高綱）

『鎌倉殿中間答記録』に「御乳夫長崎左衛門入道」とあり、これにより長崎円喜が高時の乳母夫であったと考えられている。文保二年（一二三二）および元応元年（一二三九）の鎌倉殿中間答は上代に記録がなく、本記録も偽書の可能

性が高いと見られるため問題がある。⁽²²⁾ただ偽書としても、北条高時以下問答の座にいた長崎(平)氏一族については、仮名・官途など他史料と一致しており、何らかの典拠に拠ったものと推測される。よって「御乳夫」という記載についても、一定の信頼は置いてよいのではないだろうか。

また、元亨三年(一三三三)の『北条貞時十三年忌供養記』(以下『貞時供養記』と略記)に「一品経調進方々」として、「長崎禪門」(円喜)に続けて「御乳母」の名が見え、十貫を負担している。⁽²³⁾北条高時の乳母と見られ、右の記録と併せ考えれば、円喜の妻または一族の女性であろう。

g. 北条邦時―某

正中二年(一三二五)十一月、北条高時の愛人常葉前が男子を出産した。⁽²⁴⁾若君は後の万寿丸(北条邦時)であり、母親の常葉前は得宗被官五大院氏出身の女性である。⁽²⁵⁾史料を掲げる。

【史料1】金沢貞顯書状⁽²⁶⁾

〔北条高時〕
太守御愛物常葉前今晝寅剋御産無為之上、男子御誕生之際、天下大慶、家門繁昌嘉瑞候、千万幸甚々々候也、辰始剋に令参候了、以長崎新左衛門申入候之處、即若御前御坐所へ可参旨、被申候之際、令同道、参候て奉見候了、目

得宗家の乳母と女房(山内)

出無申計候、御乳母いたきまいらせられ候、尼御乳母ふかさわ殿^{〔三郎左衛門入道妻〕}、工藤殿^{〔大善大夫入道妻〕}・美濃殿・播磨殿、其外若き女房一人祇候候つ、外二間所二兵庫頭入道候つるあひた、令賀申候了、こしよせの二間所に、大夫僧都貞昭候つるほとに、同前、新左衛門尉同前候き、其後参太守候て、謁長禪門賀申候、次太守御出之間、入見参候て、帰宅し候て、物をハ進て候、御剣一柄、^{〔左巻〕}鎧一領紅糸威、馬一疋置具揃、以貞季進候、貞匡分野剣一腰左巻同進入候了、新左衛門尉貞季二対面候て、種々物給候、特悦入候之由、可申云々、諸人参事、相模左近大夫将監殿・奥州・相模新左近大夫将監等未明に参候云々、愚身退出之後、進物時、^{〔赤橋守時〕}武州御参候之由、貞季語申候、

進物事ハ、左親衛より御剣・御馬被進候外ハ、外さまの人ハ未進候歟、愚老参入之時ハ、若御前のかたわらに、太刀五六ばかり、ふたつておかれて候き、長禪門のふるいにてそ候らんと推量候、

御辺よりの御使、周防十郎左衛門尉にて候へかしと、先日状に申て候へとも、便宜候ハて、いまた不進候、今度進候、此上者、自元用意候ハむ御使そ、早々に下向も候はむすれハ、いそぎ可被下候、進物ハ大刀・鎧はかりにて候へく候、鎧持下候ハんもわつらひにて候ハ、是に下品のハ候へハ、

野剣はかりを下され候へく候、大刀ハよく候へく候、

この事きかれて後に、しはて候て、披露ならぬさきに、定きこしめされて候らめとも、とく北方并両使へハ、内々可被申候、これハわたくしならぬ事にて候へハ、使者ハ過書を持てこそ、下候ハんすらめと存候、

大方殿ハ、いま、てハ御産所へ無御出候、只今可参賀之由思給候、

²⁾安達時節

城務一門、御産所ニも太守ニも不見候つ、不審候也、

真乘院への状一裏遣候、篋可被付遣候也、あなかしく、

(正中二年)
十一月廿二日

これは、金沢貞顕が六波羅探題金沢貞将に、高時長子の誕生を伝えた書状である。

従来の研究では、誕生した若御前(邦時)の乳母夫は長崎思元であるとされてきた。それは、傍線部1に「尼御乳母ふかさわ殿〈三郎左衛門入道妻〉」とあり、三郎左衛門入道がその名乗りから思元と考えられるためである。この解釈には二つの問題点がある。

まず傍線部1を見ると、邦時を抱いて来た「御乳母」がおり、尼御乳母以下見える女房は「若御前御座所」に祇候する存在であった。この「御乳母」こそ邦時の乳母と考え

られるのに対して、「尼御乳母」という名乗りは、より高齢の女性のように思われる。

次に、「尼御乳母」と思元の妻たる「ふかさわ殿」は別人の可能性がある。当該部分は「尼御乳母」「ふかさわ殿」「三郎左衛門入道妻」「工藤殿」「美濃殿播磨殿」・・・と墨が継がれており、間で区切られるように見えるからである。もちろん墨継ぎのみによって別人であることが確定するわけではないが、傍線部1は「尼御乳母・ふかさわ殿〈三郎左衛門入道妻〉・・・」と読む可能性が高いと考えられる。

よって長崎思元の妻は乳母ではなく、御座所に祇候していた女房衆の一人と見なすのが妥当であろう。また仮に「ふかさわ殿」を乳母の一人と見たとしても、それをもって思元個人が乳母夫とされたという裏付けとはならない。

このことについて、さらに次の関連史料を検討したい。

【史料2】金沢貞顕書状⁽²⁷⁾

御吉事等、猶々不可有尽期候、^(金沢)忠時去十一日^(北条高時)参太守候、長崎^{高時}新左衛門尉、兼日、内々申之際、参会候て、引導候て、太守御前にて三献、御引出物ニ御剣左巻、給之候、新左衛門尉役也、若御前同所へ御出、御乳母いたきまいらせ候、其後御台所の御方へ大御乳母引導候、三こんあるへく候

けるを、大乳母久御わたり、御いたわしく候とて、とくかへされて候、御引出物ハ砂金十兩はりは二入てか、ねのをしきにをく、其後御所へ参候、自太守御使安左衛門尉貞忠にて候き、兼日刑部権大輔入道ニ申之間、大夫將監親秀（摂津）参候て申次、御所へは貞冬（金沢）同道候て、御前へ参了、御剣被下也、女房兵衛督殿役也、其外近衛殿・宰相殿以下御前祇候云々、見めもよく、ふるまいもよく候とて、御所ニても太守にても、御称美之由承候之際、喜悅無申計候、又殿御料人事、内々御乳母にて、御乳父に付申候、新左衛門尉へ内々令申候之處、外さまより可承之旨申候之間、十二月廿六日吉日之際、以季実令申之処、当日披露云々、御返事者明春あるへきとて候、治定分ハ未存知候、同廿七日新左衛門尉ニハ愚老直申候き、気色あしからず候、御乳父ニも便宜に直可申候也、御料人につきまいらせて候女房達ハ、あわれされかしと申候之由承候之間、特悦入候、あなかしく、

正月十七日

正中三年（一三二六）、金沢貞顕の孫忠時が、得宗家および將軍御所への初参を果たした。【史料2】はその様子を記した貞顕の書状である。

高時の邸宅に、「若御前」（邦時）が「御乳母」に抱かれ

得宗家の乳母と女房（山内）

てやってきており、高時のもとには金沢忠時を御台所（安達時顕の娘）のもとへ引導した「大御乳母」がいた。「大」という名乗りや、「御わたり御いたわしく候とて」という姿からして、この女性も邦時の直接の乳母ではなく、より高齢の女性と思われる。例えば先代（高時）の乳母、すなわち前項に見た長崎円喜の妻である可能性が考えられる。

若君・乳母・女房と同じ空間に、こうした女性が共に存在していることは興味深いことである。経験豊富な女性による介助は、得宗子息の出産・養育あたつてはぜひとも必要なものであつたであろう。「大御乳母」や【史料1】の「尼御乳母」は、そのような役割を果たす、女性集団の長老的存在だったのであるだろうか。

【史料2】は邦時の乳母夫を考える上でも重要である。傍線部3において、金沢貞顕は「殿御料人」すなわち邦時の事について、「内々御乳母」であるので「御乳夫に付申候」といい、また傍線部4には、「新左衛門尉」（長崎高資）に貞顕自身が直接申し入れを行い、「御乳夫」にも折を見て直々に申し入れようとしている。申し入れの具体的な内容は不明であるが、この記述から少なくとも長崎高資と「御乳夫」とが別人であることは確認できよう。²⁸

このように、盛綱、頼綱、高綱と継承されてきた長崎（平）

氏の得宗乳母夫としての地位は、高資の段階では途切れている。但し【史料2】にあるように、高資は「御料人事」に関する何らかの決定に対して、大きな影響力を保持していたことは明らかである。

すでに確認したように、邦時は正室の子ではなく、「常葉前」は得宗被官五大院氏の出身だった。この邦時出産時には、高時の後継を望む北条泰家（高時の同母弟）がおり、兄弟の母である得宗家外戚安達泰宗の娘（覚海円成、大方殿）も健在である。また高時の正室は安達時顕の女であった。

このような微妙な状況下では、常葉前の子息がただちに高時の後継者とは定まらず、長崎（平）氏の嫡流が乳母夫を担いづらかったのではないだろうか。⁽²⁹⁾側室の子であるため庶子とされ、その乳母夫を務めるのは、北条時輔―諏訪盛重の例から見ても、憚られることだったのである。⁽³⁰⁾

なお後に邦時は、仮名が「相模太郎」となり、幕府が仮に存続したとすれば将来得宗となるべき人物とされた。⁽³¹⁾乳母夫については、存在は確認できるものの不明とせざるを得ない。

小 括

得宗家の乳母は、初代家令たる尾藤景綱によって先鞭が付けられ、また長崎（平）氏は得宗家嫡の養育係・後見人たる立場を足がかりに、鎌倉後期にかけて歴代得宗―乳母夫の地位を築き上げていった。その関係は少なくとも高時の代まで維持されており、こうした地位が固定化されていたことが見て取れる。⁽³²⁾

同時に諏訪氏・工藤氏も得宗家庶流あるいは女子の乳母に任命されうる地位にあり、一族の代表者は乳母夫となることができた。

このように、長崎（平）氏はじめ得宗家の中枢にあった被官層は、一族の女性を通して得宗家との結び付きを強めていくことができたのである。⁽³³⁾

3. 得宗家の女房衆

幕府女房衆についての詳細かつ包括的な研究を行った田端泰子氏は、その役割について、

- ① 出産介助や乳母として將軍家子女の養育にあたること。

- ② 幕府行事への参加。

- ③ 日常業務として將軍家を構成する人々の食事や衣類

の調整。

の三点に要約された。⁽³⁴⁾ また女房が得る重要な地位と、將軍への取り次ぎなどそこから派生する副次的な役割や、女房づとめの中から妾に転身するコースの存在についても指摘され、彼女らは、所領給与・安堵のほかに、屋地を給わったり、砂金や絹布を現物支給されるなど、広い収入源を持ち豊かな経済力を有していたことが明らかにされている。

こうした特質は、専ら將軍や幕府に奉公していた女性に關してのものであるが、得宗権力の増大とともに、得宗家に一族出身の女性が奉公することも、幕府におけるそれと同様の役割を果たしたに相違ない。

ここでは、右の田端氏の理解を念頭に置きつつ、得宗家女房を管見の限り検出し、その出自や役割について検討を加える。

(a) 河村氏秀母

『河村系図』の河村氏秀の注記に「母松下殿女房和泉局」とある。⁽³⁵⁾ この「松下殿」とは、北条時氏の正室松下禪尼（安達景盛女）であろう。このことから、和泉局は得宗の妻に仕える女房であったと考えられる。

河村氏は相模国足柄上郡河村郷を本拠とする一族で、『貞

得宗家の乳母と女房（山内）

時供養記』には「河村小四郎」が高時へ進物を収めていることが見える。

(b) 播磨局浄泉身辺の女房

永仁二年（一二九四）当時、北条貞時には後継者となる男子がおらず、將軍護持僧であった親玄は、前年から内々に「求子法」の執行を依頼されていた。⁽³⁶⁾ 貞時の愛人播磨局浄泉は、以前にも女子を出産していたが、この年再び懐妊したのである。

四月二十三日には浄泉の着帯の儀が行われ、⁽³⁷⁾ 貞時は、終始気をめぐらすような有様であった。また、播磨局の産所には女房衆が詰めており、安全な出産のために尽くしていたことが見て取れる。親玄もしばしば産所に赴き、浄泉の身固を勤め、⁽³⁸⁾ 貞時や女房の一人と思われる「讃岐局」と対面するなどしている。⁽³⁹⁾ 得宗室には着帯から出産まで、多くの女房が祇候し、世継ぎの出産を滞りなく行えるよう奉公していたのである。

(c) ありわう御前

嘉元三年（一二三五）正月三十日尼たうしやう讓狀に、「ありわう^(御前)こせん^(内)自身、御うちほうこう^(奉公)のうへハ^(上)」とあり、曾

我光頼の妻となった「ありわう」(片穂惟秀の娘)が、得宗家に奉公したことのある女性だったことが見える。⁽⁴⁰⁾「奉公」の地位は不明だが、女房衆と見るのが自然であろう。

片穂氏は、常陸国筑波郡片穂郷を本拠とする得宗被官家であり、津軽曾我氏は伊豆国安富郷出身で、北条氏の地頭代として陸奥国平賀郷に入部した一族である。⁽⁴¹⁾

(d) 伊予局

嘉元四年(一一三〇六)の北条貞時寄進状によると、相模国山内庄吉田郷内の田在家が貞時から円覚寺に寄進されているが、この土地は「伊予局上表跡」であった。⁽⁴²⁾すなわちこの文書が発給された嘉元四年以前に、この得宗領は「伊予局」に給付されていたことが明らかである。

「伊予局」については、正応五年(一二九二)に鎌倉山内に「伊予局」があり、また、乾元二年(一一三〇三)に得宗領若狭国太良庄の地頭代として「伊予局」が見える。⁽⁴³⁾これら「伊予局」は年代的に同一人物と考えられる。太良庄の給主は正安四年(一一三〇二)以降から嘉元二年(一一三〇四)まで「竹向御方」であり、鈴木由美氏によって、この女性が北条貞時の妻であることが指摘されている。⁽⁴⁶⁾得宗領が得宗↓給主↓又代官・現地地頭代によって支配・管理されて

いたという山本隆志氏の指摘を踏まえれば、「伊予局」は得宗貞時の妻「竹向御方」の又代官として、所領・得分を獲得したものと考えられる。

(e) 『時宗忌日大斎番文』に見える女房名

徳治二年(一一三〇七)の『時宗大斎番文』には、三番に「越中局」が、六番に「讃岐局」が見える。得宗家の私的行事に参加した兩人は、正しく得宗家に仕えた女房であったであろう。⁽⁴⁷⁾「越中局」は出自が不明であるが、「讃岐局」は、小口雅史氏によって得宗被官曾我泰光の妻と推定されている。⁽⁴⁸⁾

北条貞時が永仁二年(一二九四)に出した禁制において、時宗の忌日に「比丘尼并女人」の円覚寺内への立ち入りが許されているのは、こうした得宗家行事への後家・女房衆の関与を想定しての措置であろう。

【史料3】北条貞時禁制⁽⁴⁹⁾

禁制条々事

(中略)

一 比丘尼并女人入僧寺事

但、許二季彼岸中日・二月十五日・四月八日・七月

(仏涅槃忌)

(仏誕生会)

孟蘭盆兩日、此外於禪興寺者、(北条時頼忌日) 毎月初四日可入也、(北条時宗忌日)

(中略)

右条々、於違犯之輩者、不論老少可令出寺也、若於有子細者、可指申其名之狀如件、

永仁二年正月 日

(北条貞時
花押)

右の史料に明らかなように、北条時頼の忌日など多くの得宗家の法要に女房らが参加したり、結番を務めたりすることがあったことが窺われる。後に北条高時の代にも同様の制符が円覚寺へ出されており、そこには北条貞時の忌日も付け加えられた。⁽⁵⁰⁾ 得宗家の重要行事の執行には、女房衆が少なからぬ役割を果たしていたと言える。

(f) 大式殿局

小林花子氏によって紹介された、鎌倉時代『妙法蓮華經』紙背の源智消息に「大に(と)の、御つぽね」⁽⁵¹⁾が見える。小林氏によると、経文は覚園寺二代源智の菩提を弔うために、北条貞時後室(大方殿)・「大式殿御局」らによって刊行されたものであり、小林氏はこの大式殿御局を大方殿身辺の局かと推定されている。

得宗家の乳母と女房(山内)

(g) 陸奥国大平賀郷の年貢結解状に見える女房名

文保元年(一一三一)の年貢結解状に「大隅局」「伊勢局」「備前局」の名が見える。⁽⁵²⁾ 陸奥国平賀郡の得宗領からの年貢が、女房の「衣料」代として徴収されていたことを示すものであり、すなわちここに見える女房は「得宗家御所に祇候する人々」⁽⁵³⁾であった。

(h) 常葉前身辺の女房

前章で検討したように、「史料」に「ふかさわ殿(三郎左衛門入道妻)」「工藤殿(大膳大夫入道妻)」「美濃殿」「播磨殿」「その外若き女房一人」が見える。得宗家の女房衆として常葉前の産所に祇候し、妊婦の身の回りの世話や、出産助的な役割を果たしていたと考えられる。

邦時を出産した常葉前自身も得宗被官家五大院氏の出身であり、元は女房衆として得宗家に仕えていた可能性が高いのではないだろうか。

「三郎左衛門入道」は前章の通り長崎思元に比定され、「大膳大夫入道」は不明だが、今野氏は工藤氏と推定している。⁽⁵⁴⁾

小 括

限られた事例の中からではあるが、検出されたいくつかの女房役割についてまとめると以下の如くである。

- ・ 得宗とその妻への祇候。
- ・ 出産介助・産所での取り次ぎ役 (b・h)。
- ・ 得宗の側室となったり、他の被官家へ嫁したりする、というコース (c・h)。
- ・ 得宗領の知行、妻に給付された所領の代官 (d)。
- ・ 得宗家の行事への負担・参加 (e)。

こうした女房の活動を経済的に支えるために、得宗領からの年貢徴収や、女房への所領給付などが行われ、「上表(辞職)」するまで収入を得られたであろう。また取次ぎ役などによって金銭を得たことも考えられる。

史料制約は如何ともし難いが、鎌倉後期の得宗家には得宗及びその妻を支える女房集団が形成されており、田端氏が幕府女房衆の役割として明らかにされたいくつかの点は、得宗家の女房衆についても、その相似形を見出すことができる。そうした女性集団の担い手となっていたのは、主として得宗被官家の女性たちであつたと考えられる。

また、将軍家女房との重要な相違点は、女房の身分にあつたと考えられる。宗尊親王の公家將軍の時代に至って、将

軍家女房の世俗での出自は公卿の娘や公卿の母に上昇したことが指摘されており、⁽⁵⁵⁾【史料2】傍線部2にも、將軍家には上臈・中臈女房が祇候していることが見える。⁽⁵⁶⁾

一方、本報告で検出した得宗家女房は下臈からせいぜい中臈女房であり、当然のこととはいえ、同時期の將軍家とは明確な格差がある。地位の高い女性が最も見えそうな貞時の十三年忌供養など、得宗家の重要な行事に見られないということは、史料的な偏差というよりは、単に得宗家に上臈女房は存在しなかったと考えるのが妥当であろう。將軍家の女房とは、その臈次という点が大きな違いである。

この点、田端氏の「鎌倉前期の源家三代、尼御台所政子の時代と比較して、摂家將軍、皇族將軍の時代になるにつれて、女房役割は減少するように感じられる」との重要な指摘は、幕府女房と得宗家女房との類似点を踏まえて再把握されるべきであろう。⁽⁵⁷⁾細川涼一氏が指摘するように、⁽⁵⁸⁾皇族將軍の時代にも相應の女房役割はあるのであり、増減というよりは史料偏差の問題として、政治決定・権力行使の実質を得宗家を頂点とする北条氏一門が握るようになるのと、得宗家の女房衆の存在が史料中に見出されやすくなる⁽⁵⁹⁾と理解できるのではないだろうか。

4. おわりに

以上述べてきたことをまとめておきたい。得宗家には、鎌倉後期にかけて得宗とその妻を支える乳母・乳母夫、女房集団が形成されており、被官家の女性たちは、その大きな担い手となり、それぞれ得宗・妻、その子息らに祇候していた。

とりわけ執事三家、執事補佐家といった有力被官家は、得宗家の乳母・乳母夫を務めることができ、長崎（平）氏は、そのような関係を少なくとも北条高時の代まで、世襲的に維持していた。公的な役職ではないが、これは細川氏の言う「特権的」な地位の一つと見ることができ、被官層の位置づけとしても先行研究の成果に接合できる。

すなわち、乳母・乳母夫・女房衆という側面からも、得宗被官家の「家格秩序」を具体的に読み取ることができると考えられる。具体的には、長崎（平）氏は得宗家の嫡子の乳母・乳母夫を、それ以外の「執事三家」＋「執事補佐家」は庶子・女子のそれを担うことができた。北条時輔―諏訪盛重の事例から、このような分担は北条時頼期に形成されたものかと思われる。

そして女房衆は、出自を推定しうるいくつかの事例から

は、「執事三家」「執事補佐家」の庶流や、いわゆる下層の得宗被官家が、主な供給源となつていてという見通しを立てることが出来るよう。

こうした見通しをより確かなものにするには、より多くの事例の検出と、出自の解明という作業が必要である。今後の課題として擱筆したい。

注

(1) 佐藤進一「御内と外様」(『鎌倉幕府訴訟制度の研究』岩波書店、一九九三年。初出は一九四三年)。奥富敬之「得宗専制の展開」(『鎌倉北條氏の基礎的研究』吉川弘文館、一九八〇年)。細川重男「得宗家公文所と執事」(『鎌倉政權得宗専制論』吉川弘文館、二〇〇〇年。初出は一九九八年)。

(2) 以下、氏族の呼称をいう際には便宜上「長崎（平）」と表記する。これは長崎氏に「平」を名乗る人物が多いので、同一の氏族であることを示すためである。なお個人名や史料上の呼称を表記する場合には、「長崎」「平」をそのまま用いる。

(3) こうした階層区分は近年の得宗被官研究の前提となつていふと言つてよい。例えば坂井法暉氏は、奥富氏の区分を援用して、在鎌倉の南条氏を「政治官僚」、駿河国富士郡に居住する在地の南条氏を「経済官僚」としている。また今

野慶信氏は、尾藤・長崎・諏訪・南条氏らの各家を、工藤氏と併せ「上層得宗被官家」と認識されている。それぞれ坂井「南条一族覚え書き(上)」(『興風』一五、二〇〇三年)、今野「得宗被官工藤氏の基礎的考察」(『鎌倉』一〇七、二〇〇八年) 参照。

- (4) 得宗と女性をめぐる研究としては、並木真澄「中世武家社会に於ける婚姻関係―北条氏の場合―」(『学習院史学』一八、一九八一年)。得宗家に嫁した女性に関しては湯山学「北条貞時の恩人・播磨局浄泉」(『相模国の中世史』上)一九八八年。初出は一九八五年、鈴木かほる「矢部禪尼と宝治の乱―女子の財産権と結婚観から見る―」(峰岸純夫編『三浦氏の研究』名著出版、二〇〇八年。初出は一九九五年)、湯之上隆「覚海円成と伊豆円成寺―鎌倉禪と女性をめぐって―」(『静岡県史研究』一二、一九九六年)、今野慶信「葛西殿について」(葛飾区郷土と天文の博物館編『鎌倉幕府と葛西氏』名著出版、二〇〇四年)、鈴木由美「北条貞時の妻」(『段かづら』六、二〇〇八年)、寛雅博「正中の変前後の情勢をめぐって」(『金澤文庫研究』三三二、二〇〇九年)。北条氏庶流の女性をめぐる研究としては永井晋「金沢氏の夫人たち」(『金沢北条氏の研究』八木書店、二〇〇六年。初出は一九九三年)がある。
- (5) 細川重男「内管領長崎氏の基礎的考察」(同氏前掲著。注(1)参照。初出は一九八八年)、同「尾藤左衛門入道演心について」(同氏前掲著。初出は一九九六年)、岡田清一「御

内人『尾藤氏』について」(『鎌倉幕府と東国』統群書類従完成会、二〇〇六年。初出は一九七三年)、井上恵美子「北條得宗家の御内人について―尾藤氏の場合―」(『白山史学』二六、一九九〇年)など。

- (6) 森幸夫「得宗被官長崎氏に関する二、三の考察」(北条氏研究会編『北条時宗の時代』八木書店、二〇〇八年)。
- (7) 西村汎子「乳母・乳父考」(『古代中世の家族と女性』吉川弘文館、二〇〇二年。初出は一九九五年)、田端泰子「乳母の力 歴史を支えた女たち」(吉川弘文館、二〇〇五年)参照。
- (8) 米谷豊之祐「武士団の成長と乳母」(『大阪城南女子短期大学紀要』七、一九七二年)、西村氏前掲論文、後藤みち子「武家の乳母と乳母夫―『吾妻鏡』にみる―」(『鎌倉』八五、一九九七年)、田端氏前掲著、小野翠「鎌倉將軍家の女房について―源家將軍期を中心に―」(『紫苑』六、二〇〇八年)など。
- (9) 田端氏前掲著。注(7)参照。
- (10) 『吾妻鏡』安貞元年六月十八日条。
- (11) 『雑談集』三卷五「愚老述懐」。なお山田昭全・三木紀人編校『雑談集』(三弥井書店、一九七三年)によった。
- (12) 森氏前掲論文。注(6)参照。
- (13) 「遠野南部文書」仁治三年十月一日北条時頼袖判沙弥成阿奉書。および「斎藤文書」同日付北条時頼袖判沙弥盛阿奉書。それぞれ「青森県史資料編中世一」五号、三八二号。

- (14) 公文所執事の変遷については、細川氏前掲論文によった。
注(2) 参照。
- (15) 源実朝の猶子公曉の乳母夫となった三浦泰村の例がある。
田端氏前掲著書一七、一二二頁。注(7) 参照。
- (16) 『吾妻鏡』宝治二年六月十日条。同七月九日条。
- (17) 建治元年八月七日唯浄注進状案(「高野山文書宝簡集三十三」、『鎌倉遺文』一九八八号)に「相模式部大夫後見南条新左衛門尉頼員」と見える。
- (18) 梶川貴子「北条時輔後見南条頼員について」(『創価大学大学院紀要』三二、二〇一二年)。なお南条氏については、坂井氏前掲論文(注(3) 参照)、梶原「得宗被官南条氏の基礎的研究―歴史学的見地からの系図復元の試み―」(『創価大学大学院紀要』三〇、二〇〇八年)を参照。
- (19) 重見一行『教行信證の研究』法蔵館、一九八一年。
- (20) 工藤氏の系図については、今野廣信「藤原南家武智麻呂四男乙麻呂流鎌倉御家人の系図」(峰岸純夫・入間田宣夫・白根靖大編『中世武家系図の史料論 上巻』高志書院、二〇〇七年)、および同氏前掲論文。注(3) 参照。
- (21) 『鎌倉殿中間答記録』元応元年九月四日条。
- (22) ただし、この法論の記録を真書とみる見解も存在する。『日蓮宗事典』の「鎌倉殿中間答」を参照。
- (23) 『円覚寺文書』『神奈川県史料編 中世一』二二六四号。
- (24) 「金沢文庫文書」同日金沢貞顕書状。『遺』二九二五五号。
本文は後掲。
- (25) 邦時については『続群書類従 第六輯上』所収「北条系図」参照。母親の常葉前については、『太平記』が五大院宗繁の妹とし、『系図纂要』所収「北条氏系図」は宗繁の娘とする。
- (26) 「金沢文庫文書」。「神」二四四八号。
- (27) 「金沢文庫文書」。「神」二四七四号。
- (28) 永井晋・角田朋彦・野村朋弘編『金沢北条氏編年資料集』(八木書店、二〇一三年)の「解説」は、乳母夫を長崎高資に比定しているが、本稿の通り別人とすべきである。
- (29) 『史料1』傍線部2によると、男子誕生の際、得宗の外戚家である安達時顕一族は、産所にも、「太守」(高時)の下にも参上しなかった。貞顕はそのような彼らの行動について「不審候也」と記している。
- (30) このことに関して、永井晋氏は「金沢貞顕にとっても、叔母(入殿の妹)が得宗被官五大院左衛門の尉の妻であり、五大院家とのつながりがないわけではない。北条高時の周囲が長子邦時への継承で固まったことにより、金沢貞顕の執権擁立への動きが始まるのである」と述べられている。同氏「金沢貞顕総論」(『金沢北条氏の研究』八木書店、二〇〇六年)参照。
- (31) 森幸夫氏は、時宗以降の得宗家が家嫡に「相模太郎」を名乗らせ、得宗後継者として幼年時に指名されることで、家督継承の安定化をもたらしただけを指摘している。同氏「得宗家嫡の仮名をめぐる小考察―四郎と太郎―」(阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会、二〇一〇年)参照。

- (32) このような状況に鑑みて、乳母夫が確定できない北条時宗についても、森氏は長崎(平)氏一族が乳母夫であった可能性が高いと指摘されている。
- (33) 幕府滅亡の際、万寿丸(北条邦時)は母方の五大院宗繁によつて保護され、高時のもう一人の子息亀寿(後に中先代の乱の首謀者となる二郎時行)は、叔父である泰家によつて、諏訪盛高に預けられた。この時亀寿の周りには高時室の御局や、「御乳母ノ女房達」が付き従っていた。盛高が亀寿を連れて立ち去ろうとすると、「御乳母ノ御妻」は徒はだして人目も憚らず走り出で、泣いては倒れ、倒れては起きて追いかけようとしたという。御局・乳母・女房が日常的に得宗家において子息の養育に当たっていたこと、彼女らが得宗の子息と強い紐帯で結ばれていたことが窺われるエピソードである。『太平記』巻十「亀寿殿令落信濃事付左近大夫偽落奥州事」参照。
- (34) 田端泰子「鎌倉期の武士の女房」(『日本中世の社会と女性』吉川弘文館、一九九八年。初出は一九九五年)。
- (35) 『続群書類従 第六輯下』所収。
- (36) 『親玄僧正日記』永仁二年九月二十六日条。
- (37) 『親玄僧正日記』永仁二年四月二十三日条。なお着帯の儀とは、女性が懐妊して五か月目に、胎児を正常な位置に保つため、腹部に岩田帯をしめる儀式である(『日本国語大辞典』)。
- (38) 『親玄僧正日記』永仁二年七月二十六日条、同八月十日条。
- (39) 『親玄僧正日記』十月八日条、同十月十九日条。
- (40) 『遠野南部文書』嘉元三年正月三十日尼たうしやう譲状。『青森県史資料編 中世二』一八号。
- (41) 岡田清一「元弘・建武期の津軽大乱と曾我氏」(『鎌倉幕府と東国』続群書類従完成会、二〇〇六年。初出は一九九〇年)、および小口雅史「津軽曾我氏の基礎的研究」(『弘前大学国史研究』八九、一九九〇年)を参照。
- (42) 『円覚寺文書』嘉元四年九月二十七日崇演(北条貞時)寄進状。『神』一五四三号。
- (43) 『親玄僧正日記』正応五年十一月二十四日条に「天晴、今日向山内、伊予局・妙甘坊ニ対面了」とある。「妙甘坊」は、『大斎番文』十二番に見える「妙鑒房」と同一人物であろうか。
- (44) 『東寺百合文書』乾元二年四月日若狭太良莊雜掌申状案。『鎌倉遺文』二二四六九号。
- (45) 鈴木由美「若狭国太良庄給主『竹向御方』小考」(『ぶい&ぶい』二一、二〇一一年)。
- (46) 山本隆志「得宗勢力の荘園知行」(『荘園制の展開と地域社会』刀水書房、一九九四年)。
- (47) 『大斎番文』には「〇〇局」と「〇〇後家」という表記の異なる女性名があるが、これは被官家の「後家」として一族を代表する女性と、得宗家の女房衆の一員として結番を勤めるだけの経済力を有した女性、という存在形態の違いの表出であろうか。
- (48) 小口氏前掲論文。注(41)参照。

(49) 「円覚寺文書」『神』一一五一号。

(50) 「円覚寺文書」嘉暦二年十月一日崇鑑（北条高時）円覚寺制符。『神』二六四三号。

(51) 小林花子「鎌倉時代刊妙法蓮華経紙背の源智消息」（『図書館研究シリーズ』一一、一九六七年）。なお本論文については鈴木由美氏の御教示を得た。

(52) 「遠野南部文書」文保元年十二月日平賀郡大平賀郷年貢結解状。『青森県史資料編 中世一』二三号。

(53) 入間田宣夫「奥州における北条氏所領の内部構造」（『北日本中世社会史論』吉川弘文館、二〇〇五年）。

(54) 今野氏前掲論文。注（3）参照。

(55) 細川涼一「叡尊の鎌倉下向と鎌倉幕府の女性」（『戒律文化』七、二〇〇九年）。

(56) 藤次については「女房の官しな事」（『群書類従 第五輯』、「大上臈御名之事」（『群書類従 第二三輯』）によった。なお【史料2】傍線部2のうち「兵衛督殿」「宰相殿」は中臈、「近衛殿」は上臈と見なした。

(57) 田端氏前掲論文。注（34）参照。

(58) 細川氏前掲論文。注（55）参照。

(59) また、田端氏は、御家人が將軍の後見をし、將軍家と緊密な関係を結ぶことは、執権政治の時代以降、北条氏にとつては邪魔なものとなったと述べられている。このことも、得宗家と有力被官家とが女性を通じて乳母夫・後見など緊密な関係を結ぶことの重要性は増して行ったことと対照的

得宗家の乳母と女房（山内）

である。

〔付記〕成稿にあたり、河内祥輔先生・大塚紀弘先生に御指導を賜りました。また、本稿の基となったのは、二〇一一年度国史学会九月例会における研究報告です。当日は出席者の方々から貴重なご意見を賜りました。あわせてこの場をお借りして御礼申し上げます。